# 榮光

７４７号

2023年３・４月

日本基督教団
田園調布教会
伝道部発行



〒145-0071
東京都大田区田園調布
3－34－18
電 話　03-3721-2811
FAX　03-3721-2814
http://den-church.jp/


## 復活を受け継いで

コリントの信徒への手紙一　一五章一～一一節

牧師　高橋和人

イースターの喜びを申し上げます。今日は主イエス・キリストの御復活を祝います。イースターは日本では教会以外ではほとんど祝われません。それは教会に特有な内容のものだからです。イエス・キリストの復活を喜ぶ祝いは信仰を持たなければ分からないものです。かえって教会らしい喜び、それも最も大きな喜びの日です。

このイースターの出来事をパウロは福音と言い表しています。新約聖書が福音書から始まるように、福音は聖書の中心になるものです。教会の語る言葉は宣教と言われますが、福音はその宣教の中身になります。宣教は特に説教によってなされます。ですから、説教の中身は福音を語ることになります。

福音は喜びと知らせが合わさった言葉です。もともとは戦争の勝利の知らせを指したものです。罪と死に対する主の復活の勝利を伝えるものです。何よりも救いの喜びを知らせるのです。説教はこういう喜びを宣言します。

パウロは今日の個所でこの福音を「もう一度知らせます。」と言います。そしてしっかり覚えるように言います。福音を「しっかり覚えていれば、この福音によって救われます。」と言います。救いの急所になります。

福音は主イエス・キリストの復活によってもたらされました。福音は知らせですから、告げ知らされ、語られ、聞かれなければならないものです。福音は人から人へと伝えられ、引き継がれるものです。ですから福音は必ず誰かから受けています。パウロ自身も「わたしも受けたものです。」と言います。「あなたがたが受け入れ、生活のよりどころとしている福音」です。福音はその人を生かした言葉として受け止められます。そして、受け取った者の生活のよりどころとなる。このつながりは、信仰による命のつながりになる。

それには福音がしっかりと身に付いた生活の言葉になっている必要がある。そうでなければ信仰と生活の核心をなくしてしまい、あやふやなものになります。そして、信じたこと自体が無駄になってしまうとさえ言われます。

しっかりと福音を受け止めて、生活の言葉になっているためには、何が大事かをはっきりさせることです。パウロが一番大切なこととして言っているのは、福音は、聖書に書いてある通りのことだということです。

聖書は歴史に現れた神の意思を示すものです。聖書に書いてある通りにというのは、神の御心によってと言い換えることができます。わたしたちの罪のために十字架に死なれた、その主イエスが復活せられ、ケファ、つまりペトロと一二人の弟子たちに現れ、主を慕う人々に現れ、パウロ自身にも現れた。これは、神の御心によってのことです。ここに聖書に書いてある神の御心と計画がある。これを信じることが一番大事だと言います。そして、復活の主に触れたことが自分にも伝わって、自分に起こっていることが大事なのです。

そして、ここがしっかりしていないと、「信じたこと自体が無駄になってしまう」と言います。教会の危機はそこにあります。一番大事な復活のことがあいまいになって「死者の復活などない」（一二節）と言い始めるのです。これは、主イエスとの出会いと交わりを失っていることを示します。そうなると「この世の生活でキリストに望みをかけているだけ」（一九節）になります。救いは自分の生きている間のことになります。今、この世をどう生きるかばかりにとらわれ、この世の人生がすべてになってしまう。それは、キリストに望みをかけていても、この世の中の生きている間だけの希望でしかないものです。